

デート・ア・ライブ 千代クレイン

事の葉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

小学生のときは、本当に楽しかった。消しゴム一つで三十分を潰すなんて朝飯前。定規があればもつと遊べた。鉛筆一つとコピー用紙一つあれば、そこに世界を作るなんて容易だった。馬鹿だったけど、あの時が一番輝いてて。

けれども、今は違う。消しゴムはおもちゃじゃなくて、便利な道具だ。定規なんてものはちよつとした便利アイテム。鉛筆なんて使わないし、コピー用紙は縛るアイテムになっている。頭はいいけど、全然物足りない。

もつともつと、遊びたい。たったそれだけを望むのは、いけませんか？

目次

漫然とした違和感	1
違和感	5
手紙	8
愛情、亦冷静	10
塵芥	15
飛ばすには【幕引】	19

漫然とした違和感

—side 千代

私が小学生だった時、折り紙を折ることが出来るというのは一つのステータスだった。それだけで、友達は出来た。金色や銀色の折り紙を持ってたら、それだけでスターだ。でも、中学校に上がると、そんなものはステータスではなく、ただの子供の遊びに成り下がった。

私は今でも、たまに、本当にたまにだけど、折り紙で何か作ってみる。紙飛行機だったり、鶴は最近下手になった。

「すげえな、どうやって作ってるんだ？」

中学校のどっかの授業で折り紙を折ることになった日、私は一人の男子に声をかけられた。キラキラとした目でこつちを見て、中学生だっていうのに、いい意味で子供みたいで。

けれど、私はあまり上手に話せなくて、もじもじしながら、手だけは折り紙を折っていた。

その子とはそれ以降話すことはなかった。けれども、私は、また褒められるんじゃないか、って期待して、部屋で折り紙を折っていた。そんな感覚も忘れた高校生のある日。再び紙を折ろうとは、私は夢にも思わなかったんだろう。

白かった紙は、染められる。もう、あの指には戻れない。

—side 土道

今年最後のテストも終わった今日。外は雪が降っていて、二ヶ月前には想像できなかったろう程の寒さを感じる。昔はよくはしゃいだけど、最近は流石にちよつと鬱陶しさも感じる。

「五河くん。聞いてますか？」

先生に呼ばれて、ふと目線をクラスに戻す。はい、と適当に帰してまた外に向ける。何故かは知らない。いつもと違って、真つ白だから、という予測こそつくものの、それが事実かどうか、甚だ疑問だった。

「士道、どうしたの？」

昼放課、折紙がこちらに目を向け小首をかしげていた。

「ん、なにがだ？」

「今日は何かおかしい」

ぐいと顔が近づく。それでも殆ど表情の変わらない折紙とは対照的に、俺は頬が熱くなってくるような気がした。

「い、いや、なんでもないって」

「嘘。何でもある」

どうやらそう易々とは開放してくれないらしい。

仕方なく、俺は今日一日の違和感を折紙に伝えた。熱はないのに、どうやらぼうつとしてしまうこと、その原因が未だ理解できないこと。

「それなら、私にもあるぞ」

と、途端に話に入ってきた十香がくりんとした目を向けた。

「ずっと外を見てしまうのだ…なんでだ？」

「いや、俺もそれを知りたいんだけど…」

そういえば、今日は十香も外を見ていたような気がする。まあ、十香のことだから、雪に興奮しているだけということもあり得るけど。

ふいに外を見てみると、いつもより元気な生徒達が雪で遊んでいた。雪だるまを作ったり、雪合戦をしたり。それは、いい意味で子供っぽくて。

それを見て頬を緩めていると、直後けたたましいサイレンが学校を支配した。刹那の間に学校内外を駆け巡り、空間を停止させる。ぼすん、と大きな雪玉が地面に落ちる音がどうしてか聞こえたような気がした。

「…精霊」

「そう、だな」

窓から外を見上げ、俺達三人は今から起こり得る事全てを予測していた。やけに冷静に。体は動かないというのに、脳だけは変に回る。

「俺と折紙は精霊の方へ向かう。十香はどうする？」

「無論だ」

その目に迷いは無し。純粹なまでの思いで答えてくれた。

空間震が発生したのはこの学校から数百メートル離れた住宅街の一角。

『土道、気をつけなさい。いつもと同じと思っていたら死ぬわよ』

耳につけたインカムから妹の厳しい声が聞こえる。死ぬ、なんてちよつと前までは軽く使ってたけど、今じゃ全然違う。本当に死ぬ。

「ああ、それでも」

『分かってる。それでこそ私のおにーちゃんよ』

なんだか照れくさくて頬をかいた。

「来る」

霊装を纏った折紙が告げる。十香は天使<サンダルフォン>を構え、折紙は<メタトロン>でもって空へと舞う。

爆音、衝撃、熱風。目の前に爆弾でも落とされたような衝撃が全身を覆って、それから後ろへと去っていく。

それが次第に小さくなっていき、ようやくと目が開ける程度までなった時には、もうそこに元あった街は存在せず、スプーンでアイスを掬ったようなクレーターが出来上がっていた。大きさは然程ない。なので、その中心に位置する精霊の姿も容易に分かった。

彼岸花の添えられた黒い和服。膝下まではあろう長い髪。その隙間を縫って現れたのは白い翼。

それは鳥が飛び立つような仕草というよりかは、ただ持ち上げられたように宙へ浮いていく。

『<ブランク>。ASTとDEMが最重要警戒と位置づけるほどの存在よ』

そんな言葉が耳に入った気がする。けれども、今俺の頭に入るのは、眼前の光景のみ。

白い翼が羽ばたく度にヒラヒラと落ちていく白い紙。その美しさたるや、俺達三人を虜にするほどだ。

「なあ」

暫くの後、俺は口を開いた。ゆっくりと精霊の目がこちら側を向く。深い藍色をしていた。

「なんだ…？」

その言葉に返すよりも先に、天からはミサイルが降ってきていた。

違和感

—side 千代

呼び止められてそっちを向く。青い髪に青い眼。中世的な顔立ち
は、少々の疑問が張り付いてるようだった。

「なんだ…?」

何時しかぶりに会話を交わしたような気がする。が、回答を貰うよ
りも前に空から幾百というミサイルが私めがけて飛んできた。その
向こうには宙に佇む人影が見える。

「不幸紙片」

私の天使を形作るものは幾万、幾億にも及ぶ無数の紙。包み、写し、
時には切ったりもする。最弱の天使。だが、人間の文明に劣るなどと
いうことはない。

さあ、と羽の一部を宙に漂わせた、その時。

「塵殺公!!」

「絶滅天使」

天使だろうか、大剣を構えた少女と翼を生やした少女が私の前後に
現れる。そういえば、先ほど男の隣にいたような気もする。

二人の精霊が一つも漏らさずミサイルを打ち落としてしまった。

「…邪魔したな」

漂っていた紙の行き先を二人へ向ける。

「不幸紙片」——【飛行機】

紙たちは自ら形を紙飛行機へと変え、弾丸の速さで二人へ発射され
る。

「ない!?!」

大剣が紙飛行機を両断、翼が確固レーザーで打ち落としている。だ
が、それを望んでいた。

紙は一度切ると二つになる。もう一度切ると四つに…。レーザー
で打ち落とされても無駄。

紙は攻撃された場合、それが焼けるまで、粉微塵になるまで私の命
令通りの形を維持し続ける。

「せっかく暇つぶしできると思ったのに」

私の声は誰にも届かない。届けさせない。

紙飛行機の一部を二人に触れる瞬間に解除、それを四肢へ一枚ずつ貼り付けていく。

「なに、これは」

先に気付いたのは羽持ちの方だった。ギシギシときこちなく四肢を動かしている。

「体が、動かない、ぞ?」

ようやくと剣持ちのほうも気付いた。

私の紙は優秀だ。紙を貼り付ければ、その物体の動きを止めることができる。操ることはできないけれど、止めるだけでも十分優秀だろう。

私は非道な人間じゃない。動かない相手を一方的に勝る趣味はない。

はあ、興奮めだ。唯一の刺激を邪魔されては...

しかし、面白いものは見つかった。

それを一瞥し、私は紙へ身を隠した。

—side 土道

ただ呆然としていた自分が憎い。いや、見てられただけ勇敢だったと考えよう。俺が見てきたなかでもトップの天使二人に謎の精霊へブランク...。死ななかつただけ幸いだ、と考えるべきか?

最後は無数の紙へと姿を変えヒラリヒラリと舞って消えた。それは雪のように。

「十香！折紙！大丈夫だったか!?!」

二人の肩を寄せる。二人は顔を合わせてからコクリと頷いた。

「しかし...、なぜ」

「どうしたんだ? 折紙」

「精霊へブランク」は本来無差別に攻撃する。だから最重要警戒と位置づけられている。それに...」

『今回はやけに火力が低い』

折紙が続けられなかった言葉を琴里が続けた。

俺は調子が悪かったただけだろう、ともっともらしい答えを提示してみた。

『もしこれが調子が悪い、というだけだったら余程のことがあったんでしょね・・・それに、面白いことが分かったわよ』

「なんだ？」

『へブランクは土道を知っている。しかも、小耳に挟んだとかいうほどじゃなくね』

「んなつ!？」

俺の知り合いにあのような女子はいない。記憶を辿ってみてもいない。

『まあ、それでも油断は禁物よ。もしかしたら嫌な間柄だったかもしれないし』

「ああ。分かってる」

—side 千代

焦った。まさか彼がいるとは。あの時は暇潰しの邪魔をされて頭に血が上っていた。変なことをしてないだろうか？

まさか凶悪な輩だと思われただろうか？ 最近ストレスが溜まっていたし、そのせいってことにして気持ちを落ち着かせよう。

しかし困ったな。

私は折紙のケースの中から赤い折紙を取り出してぱたんぱたと折って紙飛行機を作り、それを部屋の窓からぽいと投げた。

果たして彼は気付くのだろうか。気付いてくれると良いのだが・・・

手紙

— side 土道

家に帰ってベッドに横になる。特段何をしたってわけでもないが、やはり精霊と相対するとどうも疲れてしまうのだ。

「ん・・・？なんだこの紙」

ポケットの違和感に気付き、中からそれを取り出ししてみる。

それは封をされた手紙のようだった。封蝋を外すと、折り畳まれた一枚の紙が出てきた。達筆な字で、

『明日の11時、駅前に 千代より』

とだけ書かれていた。

「まさか・・・」

いや、しかし思いつくのはあの精霊と対峙したときだけだ。十香も折紙も用件があれば直接かメールで伝えてくる。こんなことをしなくていいわけだ。

あの精霊が俺のことを知っていて呼び出してきた・・・？ しかし、俺の記憶の中に千代という名前の友達はいなかった・・・気がする。

しかし、相手は俺の顔に覚えがあるらしい。でなければこんな手紙は出さないだろう。

リビングにいた琴里に事情を説明して、明日へ備えるために早急に眠らせてもらうことにした。

どうも想像以上に疲れていたらしく、時刻は五時だというのにぐっすりと眠ってしまった。

— side 琴里

今回現界した精霊へ〈ブランク〉は少し可笑しい。彼女は基本その場から動かず、一頻り暴れてそのまま消失する^{ロスト}。そこに大きな感情の起伏、まあつまりりは人間に対しての憎悪のようなものは見当たらない。ストレス発散時と似たような精神状態が観測できる。

今回は全く違った。十香と折紙が〈ブランク〉を守った時に過度なストレスが起こり、その後は焦りが増加した。

「・・・手紙の件もあるし、面識でもあるのかしら？」

フウムと頭を唸らす。同時にコロツとチュツパチャップスが口の中で転がった。

土道の近辺を探ってみたが、千代という名前の少女はいなかった。まあ、こつちが覚えていなくても相手が覚えている、なんてことはまああることだ。

どれだけ頭を悩ませても、今の私が出来るとは今回の手紙が挑戦的な意味合いでないことを祈ることだけだ。

— s i d e 千代

明日は何を着ていこうか。私の家は古いらしく、基本行事は着物で行く決まりだったが・・・今回は洋服にチャレンジしてみようか。いやいや、変に挑戦して変な印象を持たれたら困る。無難な感じも・・・彼の記憶には残りたいし・・・

別に選り取り見取りな服を揃えているわけじゃない。元からファッションには疎かった・・・という言い訳は予め準備しておこう。「どうしよう」

勢いだけで手紙を送ってしまったが・・・そもそも気付いてなかったらどうしよう。いやいや、そんなことはきつとない。気付いていると信じよう。でも、来なかつたら？ きつと彼は私の事を覚えていない。交わした会話も両手で数えられる程度だ。小学生時代の友達なんてその後離れてしまえばすぐに忘れてしまうもの。

考え出すとキリがない。こういつたときはちやつちやとやつてちやつちやと寝るに限る。

愛情、亦冷静

—side 千代

本日は晴天也。とは行かず、パラパラと雪がちらついていた。前日から降り続いていたらしい。昼時になって少し収まった方か。

私は前日土道に届けた手紙の通り、駅前に行って来た。時刻は11時を少し過ぎたところ。

寝坊ではない。服を悩んでいたら時間が過ぎてしまった、という凡ミスだ。まさか私の優柔不断がここで足を引っ張る事になろうとは思わなかった。

結局私はニットにフレアスカートというありがたいちな服を選んだ。着物もどうかと考えたが、寒い。

「いるかな」

駅前待ち合わせ場所としてよく使われるので一人の男を見つけ出すのは容易ではない。しかも『駅前』としか書いてない。

小まめに腕時計で時刻を確認しながら土道を探し出す。

「あ、いた」

この駅のシンボルにもなっている巨大な像の前に土道はいた。だが、どうやって行けばいいのだ？

こちらら果たし状みたいな文面で手紙を出しているし、時間だつて過ぎてしまった。痺れを切らしている様子は見えないが、呆れられているかもしれない。

「お、いた」

どうしようかと人ごみに紛れて思案していると、向こうから声をかけてきた。そのまま私の心の準備なぞ知るか、とこちらにやってくる。

「お、お待ちせ・・・」

「ん？ 大丈夫だつて。たった五分だろ？ それよりも早くデート、しようぜ」

そういえば、デートになるのか、これは・・・。うん、よし。デートだ。土道とデート・・・、いやいや、大丈夫。多分私は大丈夫だ。

「最初はご飯にしよう」

「そうだな」

「何か食べたいものある？」

「ここら辺で美味しくて安いレストランはしっかりと予習してきた。どんなものだって行ける！ 和風洋風中華どんとこい。」

「うくん、俺は千代の食べたいものが食べたいな」

「え？ ああ、そ、そう」

まさかの返答に少し驚いてしまったが、大丈夫。

ならば、と私が選んだのは近くのバイキングだ。昼からだとし重いかもしれないが、しかし、和洋折衷が揃っており、学生にも優しい値段ということで好評な店だ。実を言うと、私自身の腹が減っていたことが大きな理由でもある。

「いいのか？ こんなお店」

「いいのよ。さ、食べましょう」

この店は二時間制で後払いのようで、平日ということもありすぐに席につくことができた。すぐさま私たちは鞆を席に置いて一緒に取りに行った。

ある程度自重しないと、沢山食べる女が毛嫌いされるとどっかのバラエティ番組が言っていたような気がする。いや、だったらバイキングに来るなって話なんだけど、仕方ないじゃん。お腹空いてるんだから。

一時間と五十分が経過しただろうか。談笑しながらの食事だったので思ったよりも長居し過ぎてしまったようだ。店員があと十分である、と伝えにきた。

「すまん。ちよつとトイレ」

土道が携帯を持って席を立つ。このときを私は狙っていた。

すぐに土道の分の鞆も持ってレジへと向かい、カードで支払いを済ませる。どうよこの完璧っぷり。ドラマでしか見たこと無いけど結構誇らしくなる。

「土道、こつち」

「え？ あ、え？ 払ってくれたのか？」

「まあ、そうね。それよりも早く続けましょう」

ありがとう、と感謝されてしまった。そういえば、感謝の念を面と向かって言われるのは久方ぶりかもしれない。

それから次は映画館に行つて流行の漫画原作のアニメ映画を見て、同じ店内にあるゲームセンターでスコア勝負をしたり、同じキーホルダーを取ったりした。

正直言つて、幸せだった。私がこんなに楽しくていいのか？と疑いたくなるようなほどで、死ぬ前触れじゃないかとも疑つたが、ここは自分に素直になつて今を存分に楽しんだ。

さあ、最後に私は今までの想いをぶつけるべく、ひと気の少ない公園に土道を連れ込んだ。ここは遊具のある公園ではなく、中央に噴水があり、周りに幾つかのベンチが置かれている。その周りには木々が生えており、都会の中にある数少ない自然となっている。休日は子供がカードやゲームを持ち寄つて遊び、平日の昼間は老人達の憩いの場としても使われているここは、夜になると殆ど人が通らなくなり、噴水もあつてロマンチックな場所として知られている。

入り口から左側のベンチに座り、隣に土道を座らせる。ゲームセンターで粘りに粘つたお揃いのキーホルダーが揺れる。

「あく楽しかった」

「はは、そうだな」

私は笑われるほど笑顔だったらしい。

んゝつ、と大きく背伸びをして、それから心を落ち着かせる。そんな私の内心を知つてか、空間は黙ってくれた。

「あのさ、土道。小学生の頃の話つて覚えてたりする？」

「小学生の時？ うゝん、あんまりだな。あ、でも、折紙を教えるもらつたな」

「そう、なんだ。奇遇ね。私も折紙は好きなの」

「そうなのか？」

こくりと頷く。喉から声が出なかった。

それは私だ、と今、彼に伝える事は容易だ、そう思っていた。あの時のことを話して、それから、その時から好きだったと告げればいいだけだ、そう軽く見ていた。人もいなければ、大丈夫だろう、と。

だが、現実には思ったよりも胸が痛い。あ、と声を出しても次が出てこない。頭が沸騰しそうだ。目は緊張からか瞬きが多くなり、彼の声のほかの音は遠く聞こえる。

「あ、あの、あのさ」

「ん、どうした？」

私がどれだけ緊張していても、彼は飄々と返す。そりゃあそくだ。気持ちを讀み取れることはない。

「その、変なことを言うかもしれないけれど……さ。私は、土道が……大丈夫だ。と何度自分に言い聞かせただろうか。十を超え、百に届いたやもしれぬ。

最後に私に「安心しろ」と言い聞かせ、顔を上げる。

「え？」

嗚呼、何たることか。神よ、否悪魔でも何でもいい。時を遡らせることが出来るなら、私の命を、世界を差し上げますのでどうか、どうか、数秒ほど遡らせることはできないのでしょうか。それが出来ないのであれば、人間の命を交換することはできないのでしょうか？ 私が彼の代行をすることはできないのでしょうか？

であれば、せめて、せめて、私に人を殺せる力をください。最愛の彼を殺した女^{アレ}を殺す覚悟を、力をください。

私は死んでも構いません。

「おや、思ったよりも反応が薄いですね」

嗚呼、嗚呼、そうだろうそうだろう。私は今、至って冷静だ。夢から醒めた私は冷静に夢を覚えている。いつもはすぐに忘れる夢だが、これは忘れることはなからう。この夢は、私が望み、私が実現した、たった一つの夢だったからな。

手前さえ居なければ。

「殺すだけじゃあ足りない。＜不幸紙片＞^{ペアトリーチエ}」

私の体に線が走る。それは四角形を作ると、私からペリペリと捲れ

始め、それがまた、一つの物体を象っていく。

今になってようやくと私の耳が正常に戻る。けたたましいサイレンが同時に入ってきた。彼を弔う歌はそんなものではない。

空を舞う、無数の雪。否、あれは紙か。そうかそうか。見紛うた。彼を包んでくれ給えよ。それが最初だ。あれは・・・私が、そうだな。どうしてやろうか。

私の目は、しっかりと女を捉え、耳は機械同士が激しくぶつかる甲高い音をしっかりと聞いている。周りに漂うは紙特有の落ち着かせる香り・・・今や私の大好きな香りとなっている。それから・・・それから、血の臭い。

そうだな。私がやってやらねばならないな。そのためには世界をも壊しても構わないな。そうだそうだ。そうだろう。天使よ。

塵芥

— s i d e 琴里

異常事態であるということは分かっている。私の脳も、先ほどまで思考を停止し、ただそれを見るのみであった。

眼前の巨大モニタに映るのは、しんしんと降る雪の如き紙の束、その中にただ直立する千代と反対に何度も攻撃を試みるエレン・メイザース。そして、胸に大きく穴の空いた土道の横たわる様である。

だが、私たちが目を見開き、理解しようとする躍起になるのはそこではない。その周囲の建造物、自然物に起こる異常現象だ。

直線的に線が入り、そこから付箋を剥すようにペリペリと捲れていく。もう既に幾つかのマンションが紙に化けてしまった。

その異常現象は天宮市の中央に大きな空間を作ってから停止した。

無数の紙は千代の周りを回り続けているか、もしくは武器を作り上げエレンを殺さんと向かっていた。それらは切られても切られても、再び形を作り上げる。

先日のような紙飛行機などは見当たらない。全てはエレンを殺すために、殺傷力の高い槍や刀、剣となっている。弾丸らしいものも垣間見えた。

はっ、と一同が我に帰り、すぐさま手元のコンソールを操作する。既に他の精霊たちはフラクシナスに集めた。いざというとき、彼女達に戦ってもらわねばならないかもしれないからだ。否、彼女を止められる人間は、精霊はいるのだろうか？ いないのかもしれない。あのエレンでさえ、ただの一つと傷を付けることが出来ず、むしろ劣勢に立たされているのだから。

「まずは土道を回収して！ それから・・・いざというときのためにくミストルティン」の準備も。随意領域を全て防御に」

私は指令を出すのでやっつ。いや、それが仕事だ。彼らの脳にならねばならない、それが私の選んだ道だから。

— s i d e 千代

あの女はなんだったのだ。最初は余裕の顔を見せてきた。腹立つ

だから幾つも槍を飛ばしてやった。したら急に真剣になったのだ。なつたところで何か私に変化はないが。

天使の一部は私の周囲を廻っており、攻撃を防ぐ。残りの街（街と呼べるかは知らないが）に積もった紙は私の意志でもって彼女を殺す。

否、殺してはならない。それだけでは、私の怒りは収まらないだろう。

一つの柱を失った私の心は壊れている。それを私は理解している。それだけで十分だ。

「邪魔をするな。機械共よ」

後方に見える飛行艦隊から次々と機械の兵士が飛んでくる。中には人間も見えた・・・気がするが、まあ、どちらにせよ塵芥には代わらない。

「これは・・・退かねばなりませんか」

「させるか。お前はここで死ぬんだよ。そう教えられたろう」

女の足を、紙が掴んだ。無意識だった。それほどまでに私は怒り狂っているんだろうか。にしては視界が赤く染まらん。

「ぐっ、離さない」

「ああ。そうしてやろうか」

離し、直後それを鋏の形に変え、女の足を切り落とす。膝下を全て斬るつもりだったが、どうやら少し遅れたらしい。足首より下だけが地面にどさりと落ちた。

「うぐあっ・・・」

「おや、斬り落とされるのは初めてだったか。仕方ない。誰しも初めにはある。初めては恐ろしいものな。最初は混乱する。であれば、慣らしていくしかないな」

私の紙は赤色になった。二つ目の赤は、なんとも醜く、断面は見るに耐えなかった。なのでそこを紙で塞いだ。少々棘々しているが、まあ気にするなかれよ。

バランスを失った女は地面に落ちた。そこを突いたつもりだったが、寸手のところでバリアらしい何かに防がれてしまった。

「クソが・・・」

「なんだ。私の気持ちを代弁してくれたのか。いやはや嬉しいな。お前がお前でなければの話だけだな」

無数の紙を、彼女の四方八方に槍という形で出現させる。

第一波。防がれた。では第二派を放つだけだ。どれだけ滅茶苦茶にされても、それは消滅しない限りまた使えるのだ。

何度行っただろうか。バリアの一部がようやくと剥がれた。そこへ一際大きな槍を向ける。修復能力さえも失った女はあまりに惨め。無残であった。そこに同情はしなかったが・・・まあ、当たり前だろう。

私の手が下がると同時、槍は風を切り、闇の中を白で駆け抜けた。だが、途中で止められてしまった。

何事だ。何事だ。なんだこれは。凍らせたのか？ ああ、なるほどな。

「邪魔をしたか。 兎野郎」

「ひっ・・・」

「なんだ。怯えるんなら最初から抗うじゃない」

巨大な兎の凶暴な口から放たれた冷気が白を止めたらしい。

冬に相応しくなったじゃないか。周りの紙も凍ってしまった。

じゃあ、炎を持たせればいい。氷を溶かすのは火だ。小学生だって分かる。

おや、女がどこかに行った。では、探し出さねば。探し物は昔から得意だ。掃除をすればいいだけだから。

今度は躊躇いなく、周囲の建造物その他諸々を紙に代える。どうやらあの上空にある艦隊に潜ったらしい。

足を象っていた紙で羽を作り、そこへと向かう。

「あ？」

だが、途端それは光線によって遮られた。これは見たことがあるぞ。

「誰だったかは覚えてないけど・・・」

「鳶一折紙」

「そうか。ああ、いや、誰にせよどうでもいいか」

人に危害を加えるつもりはない。

無数に降り注ぐ光線の間を縫って紙を向かわせる。私は別に動かなくてもいいのだ。増えに増えた紙を使えばいいだけなのだから。

今度はそれが風に飛ばされた。

「・・・ある程度は許容してやろうと思ったが・・・いや、ダメだダメだ。そうだ。目標に向かうためなら壁は乗り越えないと」

そうして私は色々乗り越えてきた。受験の時だっけそうだ。虐められたときも、その壁を乗り越えて、私は成長した。

積もった紙を全て浮かせ、全てを武器に変える。

今の私は・・・何に形容しようか。悩むな。ただ、真ともなものには形容できないだろう。

これはいわば悪者がする行為だ。それは知っている。今の私はゲームで言うのであればラスボスだろう。悪逆非道、ただそれを行使する救い難き悪者だ。

ならばなっけやろうではないか。

視界に映るのは巨大な兎と機械的な翼を生やした天使、それから双子の少女だ。

では、こちらはそれを超えるもので対応してやろう。

兎には獅子を、天使には化物を。双子の少女には・・・そうだな、二つの人型のもので対するか。

その間に逃げないよう、あいつの周りにも紙を送っておくか。

飛ばすには【幕引】

— s i d e 千代

兎は喰われた。むしゃむしゃと、それは次第に紙になって、私の一部になった。操っていた子供も同じく。

天使は堕ちた。イカロスを彷彿とさせた。彼女の翼は虚しく紙へと化けられた。当人も然り。

双子は一緒になった。一緒に紙になった。紙になって消えた。

私の目的はまた一つに絞られた。途中で誰かに阻害された気がするけど、私の体は紙だ。切ることは出来ても斬ることは出来ない。

「まだ、いましたか・・・」

目標は片足首が無いのにこちらに歯向かってきた。土道の血が付いた刃をこちらに向けた。

終わったのだ。私の意識、記憶、ありとあらゆるものは全て、この場で、こいつに切断された。

— s i d e 狂三

私は全てを知っている。いいえ、私だけが・・・と言うべきだろう。

彼女はあまりにも物を壊しすぎた。エレンを殺すという目的が果たされた彼女はその場を去ろうとした。だけれども、それを止めたのは残された精霊と、精霊の保護を目的とするラタトクスだった。ミストルティンを放ち、全身全霊をもって彼女を殺害せんとしていた。あの土道さんでさえ、四糸乃、折紙、八舞を失った結果激昂して我を失っていた。

だが、その戦争は世界の終末という結果で終わった。そう。千代が勝ったのである。

次々と現れるラタトクスの艦隊を、武力を、A S Tの戦力を、D E Mの無慈悲を全てかき消し、精霊の人知を越す圧倒的な力をも全てをただ紙にしたのだ。しかし、彼女も人の子・・・ということだろうか。敵意を一切向けなかった人間は生かされた。私もそうして生きた。今の私では勝てない、と悟ってしまった。いや、誰が彼女に勝てよう

か。

現在、世界に戦力はない。DEMもASTもラタトクスも、一瞬でも銃口を向けようものなら、その人間ごと紙クズにされる。

現在、世界に王はいない。彼女は暴れるだけ暴れ、世界に監視カメラを残し、消失した。その際に、各国の首脳は全て潰された。一枚の紙の中に閉じ込められ、それで各国を監視している。

現在、世界に領土はない。当たり前だ。残された人間は百を超えるかどうかというだけ。ユーラシア大陸に皆が移動し、森の奥底でひっそりと暮らしている。私も今はその中に暮らしている。

そして、思った。

“今の”私では勝てない。“今の”アレに勝てる人間は、精霊はない。武器もならない。ならば、“過去”の私はどうだろうか？ 彼女が冷静な狂気を見せる前に倒せば？

だから、私は生き延びた。変な話ではあるが、私が一瞬、運命というものを本気にした。

ならばやってみせよう。幸い、彼女が現界するにはタイムラグがある。

一度元・日本に戻り、ザフキエル刻々帝を顕現させる。タイムラグがあるといえど、それは人間の認識能力の範疇ではない。しかも、建物全てを消されたので隠れられる場所はない。あの首脳が見ていない間に。

たった一日前を選択する。直後、私の脳を【一二の弾】ユッド・ペイトが貫いた。

それは、たったの昨日。だが、私にとっては、もう見ることは無いだろうと諦めた光景だ。

駅前、たったのその光景に私は感動に涙した。人々が行き交い、多きな噴水からは水が惜しみなく溢れていた。

彼女が土道とデートするということは知っていた。何せ、土道の周りには常に私を配備しているのだから。

「・・・アンタ誰？」

彼女が駅にたどり着く前、涙を拭った私は彼女の前に立ちはだかつ

た。

怒りがこみ上げてきた。何を言ってやろうか。頭の中に無数の言葉が浮かんだ。だが、ここは押し殺そう。そうでなければあの惨劇は避けられない。

周りからは変な目で見られる。そりやあそうだ。ゴシツク調の女が突如泣き崩れたかと思うと、少女の前に出て銃を向けているのだから。

「・・・答える、義理はありませんわ。貴方は何も知らないのがお似合いですの」

彼女が、悪魔が反応するよりも先、私は引き金を引いた。

呆気なかった。彼女は即死した。こちらに恨みの顔を見せる間もなく、ただ銃弾の勢いで後ろに倒れただけだった。その顔は驚きと混乱がぐるぐる回っている。

これで終わりなのだ。このまま、彼女のいない時間軸を、士道さんに嫌われ続ける時間軸を、私は生き抜いていくしかない。けれども、士道さんを失う世界線よりかは幾億もましだ。

案の定、私は士道さんに殺されかけた。けれども、「一〇^{ユッ}の弾^ド」を使つて無理矢理納得させた。

これで、私たちの戦争は終わった。

結果的に言えば、私は世界を救ったことになる。けれども、それでもこれほどまでに虚しい救世主はそうそういない。

別の選択肢は無かったか、私は彼女を殺した後にようやつとそんなことに目がいった。けれども、たればは幾ら語れどもたればで終わる。

満月の方へ、私は紙飛行機を投げてやった。あんな煌々と照るなよ。今日はそういう気分ではない、と意味を込めたが、それは虚しく地面に落ちた。やはり、彼女の作る紙飛行機ほど上手く飛ばない。